

4:1 イエスはまた湖のほとりで教え始められた。おびただしい数の群衆がみもとに集まった。それでイエスは湖の上の舟に乗り、そこに腰をおろされ、群衆はみな岸への陸地にいた。4:2 イエスはたとえによって多くのことを教えられた。その教えの中でこう言われた。4:3 「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出かけた。4:4 蒔いているとき、種が道ばたに落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった。4:5 また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。4:6 しかし日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。4:7 また、別の種がいばらの中に落ちた。ところが、いばらが伸びて、それをふさいでしまったので、実を結ばなかった。4:8 また、別の種が良い地に落ちた。すると芽ばえ、育って、実を結び、三十倍、六十倍、百倍になった。」4:9 そしてイエスは言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」4:10 さて、イエスだけになったとき、いつもつき従っている人たちが、十二弟子とともに、これらのたとえのことを尋ねた。4:11 そこで、イエスは言われた。「あなたがたには、神の国の奥義が知らされているが、ほかの人たちには、すべてがたとえで言われるのです。4:12 それは、『彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため』です。」4:13 そして彼らにこう言われた。「このたとえがわからないのですか。そんなことで、いったいどうしてたとえの理解ができません。4:14 種蒔く人は、みことばを蒔くのです。4:15 みことばが道ばたに蒔かれるとは、こういう人たちのことです——みことばを聞くと、すぐサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。4:16 同じように、岩地に蒔かれるとは、こういう人たちのことです——みことばを聞くと、すぐに喜んで受けるが、4:17 根を張らないで、ただしばらく続くだけです。それで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。4:18 もう一つの、いばらの中に種を蒔かれるとは、こういう人たちのことです——みことばを聞いてはいるが、4:19 世の心づかいや、富の惑わし、その他いろいろな欲望が入り込んで、みことばをふさぐので、実を結びません。4:20 良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちです。」4:21 また言われた。「あかりを持って来るのは、柀の下や寝台の下に置くためでしょうか。燭台の上に置くためではありませんか。4:22 隠れているのは、必ず現れるためであり、おおい隠されているのは、明らかにされるためです。4:23 聞く耳のある者は聞きなさい。」4:24 また彼らに言われた。「聞いていることによく注意しなさい。あなたがたは、人に量ってあげるその量りで、自分にも量り与えられ、さらにその上に増し加えられます。4:25 持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っているものまでも取り上げられてしまいます。」4:26 また言われた。「神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、4:27 夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。4:28 地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実が入ります。4:29 実が熟すると、人はすぐにかまを入れます。収穫の時が来たからです。」4:30 また言われた。「神の国は、どのようなものと言えよいでしょう。何にたとえたらよいでしょう。4:31 それはからし種のようなものです。地に蒔かれるときには、地に蒔かれる種の中で、一番小さいのですが、4:32 それが蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。」4:33 イエスは、このように多くのたとえで、彼らの聞く力に応じて、みことばを話された。4:34 たとえによらないで話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちにだけは、すべてのことを解き明かされた。

## 導入

4章 1-34 節を理解するには、とくに 33-34 節に注目しなければなりません。

そこには、イエスがおもにたとえを使って教えられたと記されています。しかし、弟子たちだけに語る時は、そのたとえの意味をすべて説明なさいました。

なぜイエスはたとえを使って語られたのでしょうか。その目的は何でしょう。

## マルコ 4 : 10-12

4:10 さて、イエスだけになったとき、いつもつき従っている人たちが、十二弟子とともに、これらのたとえのことを尋ねた。4:11 そこで、イエスは言われた。「あなたがたには、神の国の奥義

が知らされているが、ほかの人たちには、すべてがたとえで言われるのです。4:12 それは、『彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため』です。」

ここでイエスは、ご自身の教え方についてイザヤ書 6 : 9-10 を引用しておられます。

まず、たとえとは何かを知る必要があります。

たとえとは、霊的な真理を指摘するために、理解しやすい話をする事です。

たいていの場合、たとえば日常のわかりやすい例と霊的な真理を照らし合わせるかたちで提示されます。

たとえば「聞く」ものであって、「読む」ものではありません。

ですから、教材としてたとえを利用する最適な方法は、声に出して聞かせ、「このたとえからイエスが教えようとしておられる真理は何ですか」と尋ねる事です。

イエスはよく、田舎町の屋外で群衆に語られました。

その際、神の御国や霊的な原理について教えるために、自然界など身近な環境を思い描けることばを使われました。

イエスがこのような教え方をなさったのには多くの理由がありますが、そのひとつは、律法学者やパリサイ人との論争を避けるためだと思われまます。

たとえには多くの解釈が可能で、はっきりと言わないので、簡単に理解できません。

ですから、イエスに敵対する人々にとっても、その教えに反対したり、イエスが間違ったことをしていると責めたりすることはなかなかできません。

けれども、イエスがたとえで話されたおもな理由は、イエスの教えを聞くことで、本当に真理を求めている人々の意識を呼び覚ますことだったと考えられます。つまりイエスは、本当に霊的な真理を知りたいと思っている人たちの心に届くよう語ろうとなさったということです。

当時、大勢の人々が身体の癒しなど目に見えるご利益を求めてイエスのもとに押し寄せました。

けれども、イエスが何のために天の栄光からこの地上に来られたのかに関心を持つ人は少なかったのです。

今日の聖書箇所には、3つのたとえとその説明が記されています。

マルコはこの箇所をととてもわかりやすく記しているため、とくに複雑な内容はありません。

### 1. 種を蒔く人のたとえ (1-20 節)

マルコは、この最初のたとえをわかりやすく記しています。

たとえの直後に、イエスによるたとえの解説が記されています。

イエスは、群衆に押しつぶされないよう舟に乗り、湖の上から語っておられました。

周りには畑が広がっています。

そこには柵も門もありません。

畑の境界線には、硬い土の通路がありました。この通路は畑の区画分けのためにあり、自分の畑がどこまでか境界線がすぐにわかるようになっていました。

この硬い土の通路は、「道ばた」と呼ばれていました。

イエスはまず、農夫が種を蒔いたが、硬い土の「道ばた」に落ちた種もあつたとおっしゃいます。

その種が育つことはまずありません。すぐに鳥に食べられてしまうからです。

イエスは次に、岩地に落ちた種もあつたとおっしゃいます。

花の苗や種を植えたことがある人ならわかると思いますが、種がしっかり育つためにはまず畑から石を取り除かなければなりません。

種はすぐに芽を出して育ち始めましたが、根を張れなかつたので、地面から栄養を得られませんでした。石がじゃまだつたからです。

いばらの間に落ちた種もあつたとイエスはおっしゃいます。

けれども結局、いばらにじゃまをされて実を实らせることはできませんでした。

最後にイエスは、「良い地」に落ちた種はたくさん実を結んだとおっしゃいました。

この話を聞いて、たとえが何であるかわからなければ、農業に関する教えだと思うでしょう。

種を蒔いてたくさんの収穫を得たければ、雑草を抜いて石を取って畑を耕して柔らかい土にしたほうがよいという話だ、と解釈するかもしれません。

そう思ったとしても、それは間違いではありません。種蒔きと収穫に関する良いアドバイスです。

しかし、それだけしか学ばないなら、このたとえの霊的な意味を見過ごすこととなります。私たちはこれを見過ごすことはありません。イエスが弟子たちに説明された内容をマルコが記録してくれたからです。

14 節は、種が神のみことばである聖書だと語ります。

そして、それぞれの種の置かれた状況は、神のみことばを聞いた時の人々の反応です。

この個所には、4 つの反応が記されています。

1. 興味を示さない人。 サタンは、神のみことばの恵みを人の思いや心からすぐさま取り去ろうと働きます。興味を示さない人とは、そのサタンの働きをなすがままにしてしまう人です。このような人は、霊的な恵みを完全にシャットアウトします。

2. 自分なりの期待を持っている人。 この個所の状況で言えば、癒しを求めてイエスのもとにやってきた人々や、犠牲を払わなくてよいならという条件付きでイエスについていった人たちを含みます。このような人たちは、福音の真理を本当に理解していません。

キリスト教のどこかに魅力を感じていますが、聖霊によって罪を示されて導かれたのではありません。イエスの十字架の死がどれほど尊いかを心得ていません。

自分の罪のためにイエスが犠牲を払ってくださったという事実が心が動かされません。

新生の体験がないので、つらいことが起こるとすぐに信仰を離れます。

本物のクリスチャンになった人たちの人生に聖霊がなされる働きについて、ヨハネは次のように明言します。

ヨハネ 16 : 5-15

16:5 しかし今わたしは、わたしを遣わした方のもとに行こうとしています。しかし、あなたがたのうちには、ひとりとして、どこに行くのですかと尋ねる者がありません。

16:6 かえって、わたしがこれらのことをあなたがたに話したために、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。 16:7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところへ遣わします。 16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。 16:9 罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。 16:10 また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。 16:11 さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。 16:12 わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。 16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。 16:14 御霊はわたしの栄光を現します。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。 16:15 父が持つておられるものはみな、わたしのものです。ですからわたしは、御霊がわたしのものを受けて、あなたがたに知らせると言ったのです。

本物の信徒は、罪と義と裁きとを現実として受け止めます。自分なりの期待を持っている人は、これら 3 つを自分に関わる重要な事柄として認識していません。

3. この世のしがらみがじゃまをして信仰を保てない人。 みことばを聞いた人たちが信仰を保てない理由はいろいろあるでしょう。そのおもなものは、19 節に挙げられているとおり、世の心づかいや富の惑わしです。  
イエス・キリストを信じていると言いながら、この世の事柄をもっと大切にしてしまう人もいます。すると、信仰を離れ、この世のことだけを考えて生きるようになります。
4. 心が整えられていて、心を開いている人。  
これは、神の聖霊によって前もって心が整えられている人です。  
こういう人は、神のみことばをそのまま受け入れます。  
議論したり、自分に都合の良いようにみことばを曲げようとしたりしません。  
みことばに納得して従います。  
そのような人は、実り多い人生を歩み、聖霊の実を実らせませす。

このたとえばは、すでに説明されているので、それ以上言うべきことはありません。  
私たちがここで確かめるべきなのは、心を常に開いておくことです。聖書を読んだり聞いたりする中で語られる神のみことばを常に受け入れられる状態でいなければなりません。

## 2. 育つ種のたとえ (26-29 節)

イエスは種を蒔く人のたとえで、福音の種を受け取って聞く人に焦点を当てています。私たちはともすると、聞く人とその善行によって救いを得られると思ってしまいます。この 100 年余り、多くのクリスチャンは対極にあるふたつの霊的真理を強調してきました。ある人たちは、救いにおける人間の責任という側面を全面に押し出し、そればかり強調します。  
またある人たちは、その対極にある考えを支持し、「神は私たちなど必要とされない。私たちがいなくても神のお働きは進む」と言います。  
どちらの考えも、極端になればそれは異端になってしまいます。  
そういうわけで、イエスは種を蒔く人のたとえと育つ種のたとえの両方を語られたのです。このたとえばで注目すべきポイントがふたつあります。

### 1. 真理は人の知識を超越する。

27 節は、神のみことばが霊の世界でどのように働くかを人は知らないと言います。  
普通の植物の種がどのように育つか誰にもよくわかりません。  
種を土に蒔けばよいとわかっていますが、どのようにして育つのかは定かではありません。  
神のみことばがどのように働くかその方法を見極めて、みことばから思いどおりの結果を得ようとする説教者や教師もいます。  
しかし、その結果は人間の試みによるもので、御霊によるものではありません。  
つまり、聖霊の働きを無視して、人を説得しようとするので、新生が起こらないのです。  
神のみことばの真理を伝える人と神のみことばをとおして働かれる聖霊、この両方が私たちには必要です。  
30 年以上前、私は聖書学校で、「ズルー族の神」という本を読みました。  
この著者カート・コッホは、各地で起こるリバイバルが本物かどうか検証した人物です。  
その中で、ある伝道者について記されていました。この伝道者は、町から町へと旅し、大きな幕屋集会で福音を伝えていました。  
集会ではいつも、多くの人々がクリスチャンになりたいと意思表示したので、この伝道者は、自分の働きが大成功だと思っていました。  
彼は数年後、新しくクリスチャンになった人たちがどのように歩んでいるかと思い、集会があった各地の町を訪れました。

けれども、ほとんどの人たちが信仰から離れ、教会には行かずに、もともとの世俗的な生き方に戻っていました。

伝道者は、なぜこんなことになったのか、何が悪かったのかと神に尋ねました。

すると、神は、伝道者本人が悪いのだとお答えになりました。

言葉で人を説得して信じさせようとしていて、それは神の聖霊のお働きではないと、神はおっしゃいました。

それから伝道者は、何日も断食して祈りました。その後、彼はズールー族の地に宣教に行き、そこでリバイバルが起こりました。信じられないようなできごともありました。

多くの人々が心から信じてクリスチャンになりました。悪霊から解放される人、難病が癒される人、ラザロのように死からよみがえった女性まで出ました。

この働きが以前と違っていたのは、神が聖霊によって働いておられたことです。

神が栄光をお受けになり、伝道者は神に働いていただくための器となったのです。

人の説得にもそれなりの力がありますが、私たちが求めるのはそんなものではありません。私たちに必要なのは、正真正銘、神の聖霊の働きです。

この個所でマルコが伝えようとしているのはそのことです。

## 2. 真理は、人に制御されない。

28節には、地は人手によらず実をならせるとあります。

一旦良い地に種が蒔かれると、人手が種にできることはもうありません。

日光や雨は必要ですが、人が太陽を照らしたり雨を降らせたりすることはできません。

ここでは、人の務めと整えられた心にみことばがとどまる神の祝福の働きの両方が大切だと教えています。

私の神学は列車のレールのようによく言います。ひとつのレールは「人の務め」であり、もうひとつのレールは「神の主権」です。

どちらを外しても、列車は脱線してしまい、たいへんなことになります。

ですから、種を蒔く人のたとえと育つ種のたとえは一对です。神のみことばが人にどう働くかを考える上で、両方が必要なのです。

私たちに、神のみことばを伝える務めがあります。神の務めは、整えられた心に働くことです。

## 3. からし種のたとえ (30-32節)

このたとえは、人々を励ますために語られました。

からし種は、蒔く種で一番小さいけれど、成長するととても大きな植物になります。

このたとえは、整えられた心に神のみことばの種を蒔き続けなさいと、私たちに励ましてくれます。

種の成長には時間がかかります。ですから、成長の祝福をこの目で見ることはいかなるかもしれません。

けれども、種まきをやめてしまったら、何も起こりません。

詩篇にあるように、私たちは涙とともに種を蒔き続けなければなりません。そうすれば、いつの日か、神がみことばをとおして働いてくださったと喜ぶ日がやってきます。(詩篇 126 : 6)

ずいぶん昔のことですが、ある小さな子ども会がありました。

そこでは、イエス・キリストを信じると言った子はひとりしかいませんでした。

先生はがっかりしました。

けれども、その少年の名はビリー・グラハムと言いました。この先生も、後にはこのからし種のたとえを思い起こしたかもしれません。

神のみことばの種を蒔くのは、やりがいのあることです。

私たちは、整えられた心を持つ人へと導かれるよう神に祈らなければなりません。

#### 4. 柀の下のあかり (21-25 節)

あかりやろうそくは、暗いところを照らすためにあります。

この個所は、神のみことばを分かち合って伝えていくようにと励ましてくれます。

聖書は、教会の中だけで学ぶためのものではありません。教会に来ない人たちとも分かち合うためにあるのです。

月曜の夜と火曜のお昼に、西村弘之兄弟の前夜式と葬儀がありました。そこで、私は神のみことばを分かち合うことができました。

神がご自身のみことばを用いて、参列者の方々の心に何かを残してくださると信じています。

神がみことばをとおして人々の心に働いてくださるよう祈りましょう。

たいていの場合、私たちが神のみことばを届けなければならない人は、日曜日に教会に来ていません。

ですから、私たちが出かけて行って、神のみことばをその人たちに届けなければならないのです。

この春、神の助けによってそうできますように。